

APIR Trend Watch No. 53

持続可能なインバウンド戦略を目指して： オープンデータを利用した北陸地域の分析

APIR 数量分析センター長 稲田 義久
インターン生 野村 亮輔

要旨

2018 年関西国際空港(関空)入港の訪日外客数(インバウンド需要)は 765 万 2,130 人を記録し、前年比+6.8%と 7 年連続のプラスとなったが、これまでの 6 年連続 2 桁の伸びが 1 桁に減速した。その理由としては自然災害の一時的な影響が考えられるが、今後インバウンド需要が持続可能となるためには様々な課題が考えられる。その一つがオーバーツーリズムであり、一要因として訪日外客の大阪・京都府への偏在が考えられる。この課題に答えるために、偏在の対極にある広域関西の周辺県である福井県とその近隣県に焦点を当てた。本分析で得られたインバウンドビジネス戦略への含意は以下のようである。

- 1) ビッグデータ(モバイル空間統計やクレジットカードデータ)は、訪日外客数の推移や消費行動を高頻度で把握できる。またこれらのデータは国籍別にも把握できることから、インバウンドビジネス戦略を考えるうえで、重要なインフラとなる。
- 2) 訪日外客数を見れば、福井県は近隣県から大きな格差をつけられている。国籍別の分析から、自治体の海外プロモーションの重要性が示唆される。
- 3) 海外プロモーションは重要であるが、問題は投資の効率性であろう。各県が独自のプロモーションをかけることも重要だが、広域 DMO などの組織を通じたプロモーションが重要となろう。
- 4) クレジットカードデータ分析から、周遊プログラムの充実、またキャッシュレス決済システムのインフラ整備を充実させることが重要である。
- 5) 訪日外国人の移動パターン分析から見られるように、福井県は前後に岐阜・石川県を控えており、通過県となっている。このため、北陸広域を周遊するプログラムが必要となろう。周遊プログラムの開発ないしはストーリー性のあるプログラム作りが訪日外客の定着に重要である。

1. はじめに

前回の APIR Trend Watch No.51(2019)では、入出港からみた訪日外客の移動パターンを明らかにした。本稿はその地域版である。近年、オーバーツーリズムが危惧されているように、訪日外客数は全体としては着実に増加しているものの、一定地域に偏在しているため、これがインバウンドツーリズムの持続可能な発展を危うくしている。この課題を解決する一方法は、いかに訪日外客を域内外に回遊させるか、また回遊可能となるプログラムを提供できるかにある。また訪問時期の分散化、季節性の緩和も重要なポイントとなろう。広域関西¹を見れば、訪日外客は大阪・京都府に集中し、滋賀・兵庫・奈良・和歌山の各県は増加しているものの、大阪・京都府への偏在を免れない。2017 年の宿泊旅行統計調査によれば、同年の関西広域における外国人延べ宿泊者数(従業者数 10 人以上の事業所ベース)は 18,283 千人泊で、そのうち大阪府は 10,837 千人泊(59.3%)、京都府は 4,819 千人泊(26.4%)と関西広域全体の 85.6%を占めている。一方、兵庫・滋賀・和歌山・奈良県への訪日外客は 11.6%にとどまり、ましてや徳島・鳥取・福井・三重県への訪日外客は 2.8%と偏在は著しい(図表 1-0)。このデータからも訪日外客の回遊を誘導・促進する仕掛けの重要性が確認できる。

図表 1-0 関西広域における外国人延べ宿泊者数：2017 年

府県名	宿泊者数 (千人泊)	シェア率	府県名	宿泊者数 (千人泊)	シェア率
滋賀県	367	2.0%	鳥取県	122	0.7%
京都府	4,819	26.4%	徳島県	77	0.4%
大阪府	10,837	59.3%	福井県	55	0.3%
兵庫県	1,090	6.0%	三重県	260	1.4%
奈良県	254	1.4%			
和歌山県	403	2.2%	関西	18,283	100.0%

出所：宿泊旅行統計調査(2017)

本稿の目的は、オープンデータを用いて訪日外客の遍在性を明らかにするとともに個票データを考慮して、この課題を解決するための戦略への含意を導出することにある。このため今回は、広域関西で訪日外客数の最も少ない福井県を取り上げ、その実態及び理由について総合的に分析する。その際、当該県を中心に近隣県との関係を重視する。これまで行ってきた『訪日外国人消費動向調査』の個票データからの訪日外客の移動パターン分析が役に立つ。オープンデータと個票データの

¹ 観光戦略を考える場合、ここでは広域連合構成府県(滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県、鳥取県、徳島県)に福井、三重を加えた 2 府 8 県ベースで考えている。

分析をうまく絡ませることで、インバウンド戦略に資する含意を導出していきたい。また本稿以降のレポートでは、順次、分析地域を拡大していく予定で、最終的には広域関西の課題が明らかにされるであろう。

分析に入る前に、代表的な観光オープンデータを整理しておこう(図表 1-1)。これらのデータはそれぞれ特徴があり、相互に補完的で分析の目的に応じて活用されるべきものである。特徴的なことは、最近では高頻度で大量のデータが利用可能となってきたことである。RESAS²のうちモバイル空間統計の活用やクレジットカードによる消費分析などは、ビッグデータの具体例といえよう。これらのデータを用いることにより、各府県、主要都市における月次ベース(高頻度)での訪日外客の動態が把握可能となる。これに訪日外客の移動パターン分析を絡ませることにより、インバウンドビジネス戦略に資する含意の導出が期待される。これまで筆者達は国土交通省近畿運輸局との共同研究により『訪日外国人消費動向調査』の個票データに基づく一連の分析(稲田・松林・木下(2018)、稲田・松林・野村(2019))を行ってきた。今回は代替的なオープンデータを有効利用しながら、広域関西インバウンドの地域分析を行う。

以下の 2 節では、モバイル統計やクレジットカードデータを利用して広域関西周辺の福井県と近隣県に焦点を当て、訪日外客の動態や消費構造を分析する。3 節では、個票データから福井県を含む 4 県の訪日外客の移動パターン分析を行う。最後に、両者の分析からインバウンドビジネス戦略のための含意を導出する。

図表 1-1 代表的な観光オープンデータ

統計名	官公省庁名	集計頻度
訪日外国人消費動向調査	観光庁	年次/四半期
訪日外客数の動向	JNTO(日本政府観光局)	年次/月次
出入国管理統計	法務省	年次/月次
FF-DATA	国土交通省	年次
モバイル空間統計	RESAS 外国人滞在分析	月次
VISA クレジットカードデータ	RESAS 外国人消費の構造	月次
宿泊旅行統計調査	観光庁	年次/月次
旅行観光消費動向調査	観光庁	年次/四半期

2. 宿泊旅行統計調査・RESAS データから見た訪日外客の分析:福井県を中心に

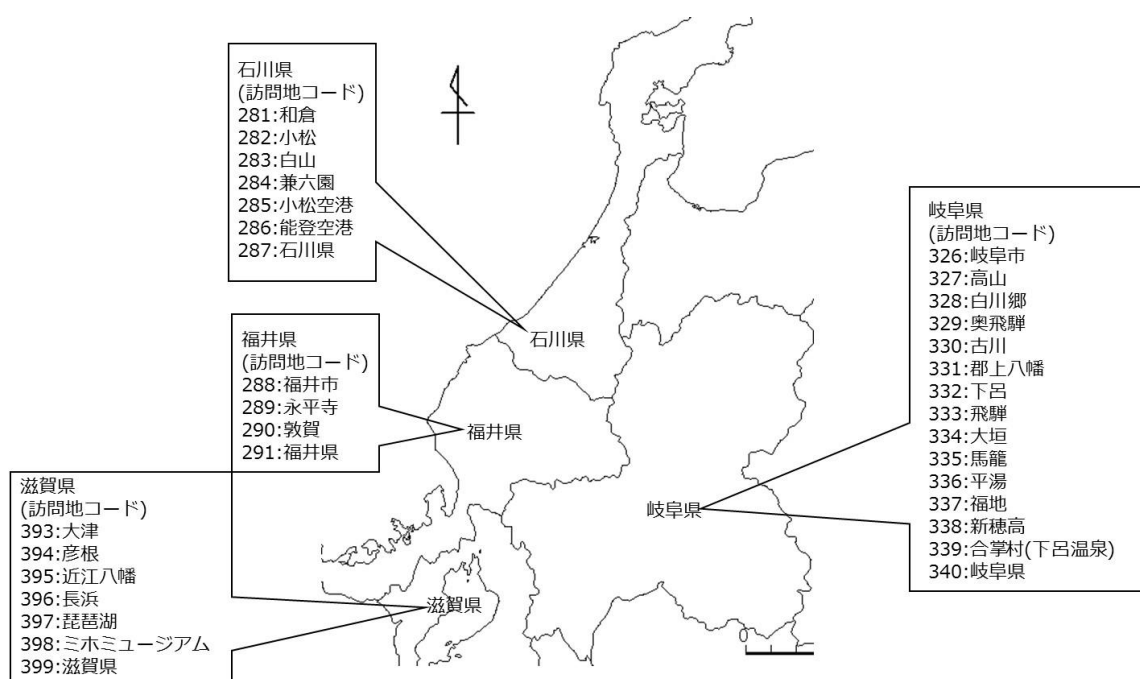
福井県と近隣の石川県・岐阜県・滋賀県について、宿泊旅行統計調査と RESAS のデータベースを基に外国人滞在者分析を行う。ここで各県経済の規模感を確認するために、2015 年の人口と同年度

² RESAS(地域経済分析システム)は、地方創生の様々な取り組みを情報面から支援するために、経済産業省と内閣官房(まち・ひと・しごと創生本部事務局)が提供している。

の県内総生産(確報値、名目)を見ておこう。福井県の人口は787千人、県内総生産は約3.2兆円である。石川県は1,154千人、約4.6兆円、岐阜県は2,032千人、約7.9兆円、滋賀県は1,413千人、6.1兆円となっている。広域関西圏の一県である福井県は、人口・域内総生産のいずれにおいても、近隣の岐阜・滋賀・石川県を下回っている。

次に図表2-0に本稿の対象となる4県について各訪問地の情報を示しておく。各県に示されている3桁の数字は3節の移動パターン分析に用いられる訪問地コード(訪日外国人消費動向調査 個票ベース)であり、各県の空港、市町村や主な観光地名が示されている。これらを用いて移動パターンが認識可能となる。また2-1節では宿泊旅行統計調査から福井・石川・岐阜・滋賀県の外国人宿泊者数の推移、2-2節ではRESASの外国人滞在分析から昼夜間の滞在人口を把握し、国籍・地域別の滞在者を見る。最後、2-3節ではRESASの外国人消費の構造より4県のクレジットカードによる消費額を見る。いずれも月次データである。

図表 2-0 分析対象とする4県と訪問地情報



2-1. 宿泊旅行統計調査

宿泊旅行統計調査から福井県と隣接する石川県、岐阜県、滋賀県の訪日外客の宿泊者数を見ると、2017年は、岐阜県856千人泊、石川県711千人泊、滋賀県367千人泊(再掲)、福井県55千人泊(再掲)となっており、岐阜県がもっとも多く、次いで石川県、滋賀県、福井県と続く。ちなみに、前出の大阪府の宿泊者数と比較すると、福井県の近隣で最大の訪日外客数を抱える岐阜県で約1/12、福井県に至っては約1/200となっており、明らかに訪日外客数の偏在を確認できる。

2015 年以降の訪日外客の各県訪問パターン(後掲図表 2-1 参照)を月次ベースで見ると、春と秋、特に桜や紅葉の時期に共通の山がある。石川県・岐阜県・滋賀県の季節性は明瞭であるが、福井県はそもそも訪日外国人宿泊者数が少なくわずかに 4 月に季節性が見られるのみである。この間、福井県周辺の石川県・岐阜県・滋賀県は訪日外国人宿泊者を着実に増加させているが、福井県は低水準にとどまっており、宿泊者誘致に課題を残しているといえよう。この課題解決には積極的な対外プロモーションが必要となろう。

2-2. RESAS : モバイル空間統計

次に、RESAS のオープンデータから福井県・石川県・岐阜県・滋賀県の訪日外国人の動態を見る。RESAS のデータベース内には『外国人滞在者分析』があり、昼間帯(10~18 時)と夜間帯(2~5 時)の時間帯区分で訪日外客の滞在者数³を月次ベースで入手可能である。これは民間のビッグデータである『モバイル空間統計』を用いており、このデータは約 400 万台の携帯電話の運用データを基に、訪日外客が使用している携帯電話からローミングデータを全国各基地局が集計し拡大推計を行うことで、該当地域での滞在者を算出している。昼間帯は観光・レジャー、ビジネスなどが活発に行われる時間帯、夜間帯は 2~5 時という時間帯であり、宿泊者や深夜・早朝行動者などの行動が把握される時間帯と考えられる。総じて夜間帯は昼間帯に比べ、滞在者が少ない。こうしたビッグデータは、従来のヒアリングを中心とする調査から得られる情報とは異なり、動的でリアルタイムに近い訪日外客の分析が可能となる。本節では主にこれらのデータを用いて 4 県の特徴を見ていく。

後掲図表 2-2-1 から 2-2-2 はモバイル空間統計から 4 県の昼夜間滞在者数を、後掲図表 2-2-3 から 2-2-10 は 4 県の昼夜間滞在者数を国籍別に見たものである。いずれも月次ベースの推移である。

【各府県の訪日外国人滞在者数:全国籍】

4 府県の昼夜間滞在者を比較すると、昼夜帯ともに岐阜県が最も多く、次いで石川県、滋賀県、福井県の順で続いている。しかし、夜間帯に注目すれば一部、滋賀県の滞在者が石川県より多い時期(2015 年から 16 年)が確認されることから、夜間帯における滋賀県は隣接県である 3 県にとって無視できない存在であるといえる(後掲図表 2-2-1、2-2-2)。京都府で宿泊できない外国人が一部滋賀県に流れる可能性を指摘できる。

【各府県の訪日外国人滞在者数:国籍・地域別】

全国籍の分析に加え、主要な国籍・地域別滞在者数の推移を見ていく。

³ ここでの滞在者とは、観光・レジャー、ビジネスなどを含んだ全目的で、指定地域の昼間帯または夜間帯に 2 時間以上滞在した外国人数を日別に算出し、対象期間の日数分を積算した延べ人数である。また、同一人物が複数の地域に滞在した場合や該当地域に複数日跨って滞在した場合は複数カウントしている点に留意する必要がある。

福井県を見ると、昼間帯では中国からの滞在者が多く、次いで香港、台湾、北米と東アジアが多い一方で、欧州・オーストラリアの滞在者は少ない(後掲図表 2-2-3)⁴。夜間・昼間滞在者比率を見ると中国と韓国は約 70%後半と高いが、台湾、香港は約 50%と低い(後掲図表 2-2-4)。ただ、中国は昼夜帯ともに滞在者数は多いものの、2015 年の爆買い期以降、減少傾向が見られている。昼間帯においては台湾・香港は中国に対して水準は低い、増加傾向で推移していることから、滞在者の傾向に変化が見られ始めている⁵。

石川県を見ると、昼間帯では台湾の滞在者数が最も多く、次いで北米、香港、欧州の順である。アジア・欧米からの滞在者の増加傾向が見られる一方、中国の滞在者数は減少傾向にある(後掲図表 2-2-5)。夜間帯では、昼間帯と同じく台湾、北米、香港の順と続くが、欧州と入れ替わって中国からの滞在者数が多い(後掲図表 2-2-6)。夜間・昼間滞在者比率を見ると、北米、台湾、中国が約 70%後半で高く、韓国、香港は約 70%を切っている。この間の傾向を見れば昼間帯では台湾・香港・欧米は増加傾向であるが、中国は昼夜間帯ともに減少傾向が見られ始めている。なお、欧州では 8 月に滞在者が急増するパターンが見られる。

岐阜県を見ると、昼間帯では台湾、中国、香港、欧州の順で滞在者が多いことから東アジアを中心とした傾向が見られるが、近年は欧州の滞在者も着実に増加している(後掲図表 2-2-7)。夜間帯を見ると、中国が最も多く、次いで台湾、香港、欧州の順となり、昼間帯に多く滞在していた台湾は夜間帯になると減少する傾向が見られた。夜間・昼間滞在者比率を見ると、中国が約 90%と高く、オーストラリア、北米、欧州が約 60%となっている。アジアは相対的に低く、特に台湾は約 40%台である。7・8 月の時期の中国夜間・昼間比率は、100%を超えている(後掲図表 2-2-8)⁶。

滋賀県を見ると、昼間帯では中国が最も多く、次いで台湾、韓国、北米の順で滞在者が多い。中でも台湾・香港・韓国は増加傾向にあるが、中国・欧米は横ばいで推移する傾向にある。また、滞在者数は少ないものの、オーストラリアの滞在者も着実に増えつつある(後掲図表 2-2-9)。夜間帯を見ると、中国、台湾、韓国、北米の順で多い。しかし、昼間帯と比べ中国は減少を続けている一方で、台湾・韓国は増加傾向で推移している。夜間・昼間滞在者比率を見ると、台湾では約 110%と高く、昼夜の滞在者が逆転している。京都の宿泊制約から滋賀に流入していることが考えられる。特に、台湾は 2 月、3 月、7 月、10 月時期に昼間帯より夜間帯に滞在者が多くなる傾向が見られた(後掲図表 2-2-10)。

以上、4 県内の昼夜帯滞在者を見ると、以下の特徴が見られる。①4 県ともに東アジアからの滞在者が多い、②近年、岐阜県・石川県においてはアジアだけではなく欧米の滞在者も増加傾向にある、③福井県・石川県・滋賀県の中国の滞在者は昼夜帯ともに減少もしくは横ばいで推移している。④

⁴ ここでの北米とは米国、カナダ、欧州とは英国、フランス、ドイツ、イタリア、スペインのことを指す。

⁵ 一般的に昼間帯と夜間帯の滞在者数の格差大きければ、当該地が通過地点であると考えられる。

⁶ 中国の夜間帯滞在者数が昼間帯を上回る理由については不明で今後の課題である。

欧米からの訪日外客増加の一因として各自治体のプロモーションが考えられる。特に近年では、石川県や岐阜県はスペインに向けたプロモーションを積極的に行っている他、滋賀県は台湾、タイ、フランスなど向けのプロモーションを行っている。滋賀県の場合は、既にみたように昼夜間帯の滞在者が逆転していることから明らかである。

2-3. RESAS : 外国人消費の構造(VISA クレジットカードデータ)

本節の最後では、4 県内における訪日外客の消費についてみていく(後掲図表 2-3-1~2-3-4)。

RESAS のデータベース『外国人消費の構造』よりクレジットカードによる消費額のデータが得られる。ここでのクレジットカードデータとはビザ・ワールドワイド・ジャパンのカードデータを再編加工したもので、集計の対象となるものは VISA ブランドのクレジットカード、デビットカード、プリペイドカードである。このデータからは都道府県別・国籍別・地域別・品目別での消費額を月次ベースで入手できるため、訪日外客のキャッシュレス決済について分析することが可能である⁷。以降では、4 県のクレジットカード消費を全国籍・費目別に見ていく。

福井県の消費額を見ると、小売・宿泊の支出が多く、飲食や観光・エンターテインメント(以下、エンタメ)支出は少ない傾向が見られる。小売支出額は 2015 年から 16 年にかけて増加傾向が見られたものの、17 年 5 月をピークに減少している。また、宿泊支出額も同様に 15 年から 16 年にかけて増加傾向が見られたが、17 年 1 月をピークに減少している。季節性をみると小売支出は 2 月・4 月に増加が見られ、宿泊支出は 4 月・11 月に増加が見られた(後掲図表 2-3-1)。

石川県の消費額を見ると、宿泊・小売の支出額が多く、飲食と観光・エンタメの支出額は少ない。宿泊・小売の支出額はともに増加傾向で推移し、2 月・4 月・11 月に増加する季節性が見られる(後掲図表 2-3-2)。

岐阜県の消費額を見ると、宿泊支出が多く、次いで小売支出と続く。また、飲食、観光・エンタメ支出も少ないながらも増加傾向で推移している。宿泊・小売の支出額は 4 月・10 月に増加する季節性が見られる(後掲図表 2-3-3)。

滋賀県の消費額を見ると、小売・宿泊支出が多く、飲食と観光・エンタメ支出は少ない。小売支出額は増加傾向で推移しているが、宿泊支出額は 2015 年から 16 年にかけて着実に増加したものの、17 年では横ばい傾向である。また、小売支出は 4 月・7 月、宿泊支出は 4 月・11 月に増加する季節性が見られる(後掲図表 2-3-4)。

以上 4 県のクレジットカード消費からわかる特徴は以下のとおりである。①4 県とも消費総額に占める小売・宿泊の支出割合が高く、飲食や観光・エンタメの支出割合は低い。②4 県とも 4 月に小

⁷ ここでの国籍・地域とはカード所有者の居住地を指し、消費額は外国人観光客がクレジットカードを使用した消費額を地域別のシェア率等から算出した金額である。消費額については「NILSON REPORT」に記載されているデータを用いて算出されているが、具体的な算出方法は情報開示されていない。

売・宿泊支出が増加する傾向が見られる。③石川県・岐阜県は宿泊支出比率が高く、福井県・滋賀県は小売支出比率が高い。これは夜間滞在者のデータとも整合的である。

3. 個票データからみた訪日外客の移動パターンの分析:福井県を中心に

前節では、当該県への訪日外客の動態並びに消費の推移を見た。本節では、訪日外客の福井県を中心とする移動パターンを分析する。

3-1. 訪日外客の移動パターン

福井県を通る移動パターンを下図のグラフ(図表 3-1-1)を用いて説明していく。これは 2015 年第 1 四半期(以下、Q1)に福井県を通った訪日外客の移動パターンを示している。まずグラフの読み方について説明をしていく。縦軸には訪問地コードが示されており、これは個票データ⁸内に 632 個存在する 47 都道府県別の訪問地情報に 1~632 の通し番号をつけて数値化したものである。グラフから具体的な例を挙げれば、291:『福井県』を起点とした場合、279:『金沢』、361:『名古屋』のように数値が小さくなれば東へ、大きくなれば西の情報を示している。また、グラフ背景には地域別に色付けをしており、ブルーは北海道から関東、ピンクは中部から関西、グリーンは関西以西を示している。なお、今回は分析対象 4 県について分析を行うため、北陸地域をイエローで示している。次に、横軸の目盛りは入国してからの第何番目の訪問地の情報を示しており、これにより入国から出国までの訪日外客の移動情報について得ることができる⁹。以上から、訪日外客の移動パターンを視覚化することで、入国してから出国するまで、どの地域・都道府県に移動しているかについて分析が可能となった。以下では分析対象の 4 県から近い小松空港、関空、中部国際空港(中部空港)の 3 空港から入国した訪日外客の代表的なルートより読み取れる情報を基に分析を行っていく。

2015 年 Q1 のサンプルから代表的な移動パターンについて説明していく。図で示されている代表的なルートはリピータの訪日中国人客が 7 泊 8 日滞在したケースである。まず、入国は 380:『中部空港』を使い、その後第 2 訪問地で 327:『高山(岐阜県)』へと移動し、第 3 訪問地では 361:『名古屋』へと戻り、第 4 訪問地の 328:『白川郷』に訪問している。第 5 訪問地では 333:『飛騨』へと移動し、第 6 訪問地では 279:『金沢』を訪れたのち、291:『福井県』に移動し、380:『中部空港』

⁸ ここで示す分析は APIR と近畿運輸局との共同研究の成果の一部である。記して謝する。

⁹ ここで訪問地番号と滞在日数は必ずしも一致しない点に注意する必要がある。例えば滞在 1 日目で 2 つの訪問地に行く可能性もあるし、2 日間で 1 つの訪問地に居続ける可能性もある。

で出国している。このルートはいわゆる、昇竜道(ドラゴンルート)¹⁰に似たルートである。本来の昇竜道では中部空港で入国した場合、小松空港へ抜けるルートか東京など関東で入国したのち中部空港で出国するルートが定番となっている。しかし、このサンプルでは中部空港で入出国し、愛知県、岐阜県、石川県、福井県を通っており、北陸を中心とした移動パターンである(後掲図表 3-1-1)。

次に、2016 年 Q1 の移動パターンはリピータの訪日台湾人客が 4 泊 5 日滞在したケースである。入国には 285:『小松空港』を使用しており、第 2 訪問地:291『福井県』へと移動している。その後、第 3 訪問地:279:『金沢』、339:『合掌村(下呂温泉)』へと訪問したのち、285:『小松空港』で出国している。このルートでは石川県、福井県、岐阜県の 3 県を訪問する行動範囲をコンパクトにした移動パターンであった(後掲図表 3-1-2)。

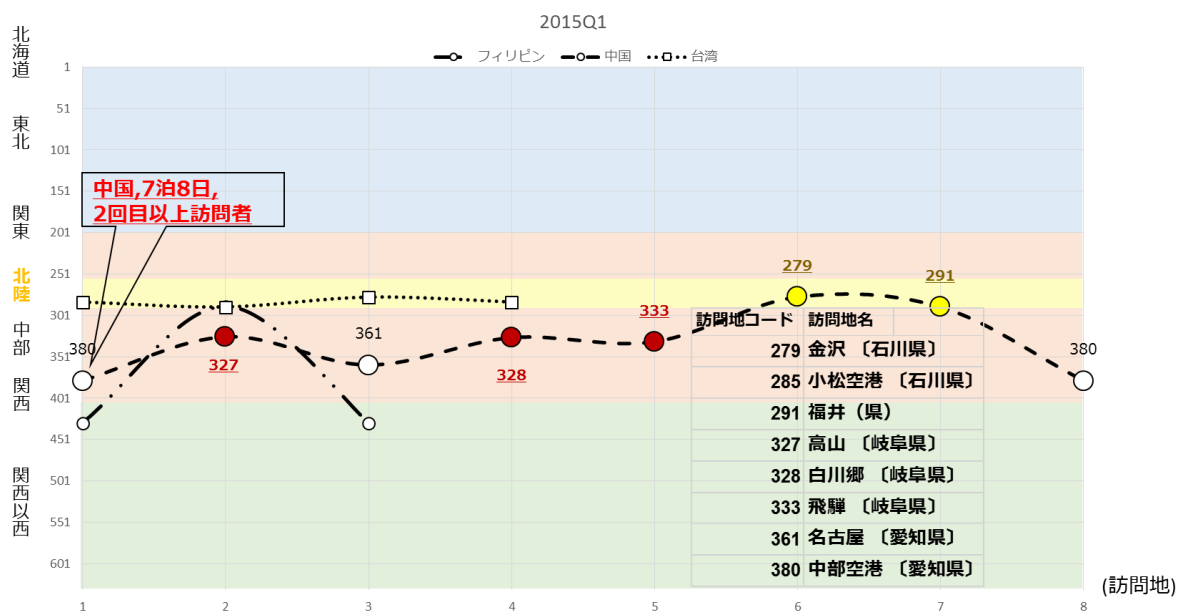
最後に 2017 年 Q1 の移動パターンはリピータの訪日中国人客が 9 泊 10 日滞在したケースである。入国には 431:『関空』を使用し、第 2 訪問地の 291:『福井県』、第 3 訪問地の 279:『金沢』で北陸地域へ移動している。次に、第 4 訪問地の 327:『高山』、第 5 訪問地の 340:『岐阜県』、第 6 訪問地の『名古屋』で中部地域へ移動したのち、第 7 訪問地:『大阪市』、第 8 訪問地:431『関空』で関西へ戻り出国している。このルートでは、大阪府、福井県、石川県、岐阜県、愛知県の 3 地域 5 府県を周遊する広範囲な移動パターンが見られた(後掲図表 3-1-3)。

以上より、3 つの移動パターンから得られた特徴は以下の通りである。①昼夜滞滞在者のデータからもわかるように、訪日外客の国籍は東アジアが中心である。②福井県を訪問する際、石川県の存在を無視することはできない。特に②に関しては、3 つの代表的なルートとも、福井県から石川県へ移動する、もしくは石川県から福井県を移動するパターンが見られる。この 2 県を通るルートは訪日外客を回遊・定着させるプログラムを考える上で欠かせない視点である。

¹⁰ 昇竜道には 4 つのコースが存在し、それぞれ Dragon コース、Nostalgic コース、Great Nature コース、Ukiyo-e コースである。Dragon コースは、名古屋から能登半島へ向かうルートであり、下呂温泉や和倉温泉など日本の伝統文化を体験することを狙いとしている。Nostalgic コースは、能登半島から合掌造り集落、熊野古道、伊勢神宮など世界遺産を中心に周遊する。Great Nature コースは、東京などからアルペンコース、東尋坊など自然を楽しみ周遊するルートである。Ukiyo-e コースは、東海道を中心に周遊するルートであり、古戦場など歴史・文化を楽しむことが主体である。

図表 3-1-1 2015Q1:観光・レジャー目的、全国籍、初回・2回目以上訪問者

(訪問地コード)



4. 分析の含意

2 節及び 3 節の分析からインバウンドビジネス戦略にとって、以下のような含意が得られる。

- 1) ビッグデータ(モバイル空間統計やクレジットカードデータ)は、訪日外客数の推移や消費行動を高頻度で把握できる。またこれらのデータは国籍別にも把握できることから、インバウンドビジネス戦略を考えるうえで、重要なインフラとなる。
- 2) 4 県の訪日外客の滞在者数を比較すると、福井県は近隣県から大きな格差をつけられている。訪日外客は岐阜県が最も多く、次いで石川県、滋賀県、福井県の順である。しかし、夜間帯に注目すれば一部、滋賀県の滞在者が石川県より多い。滋賀県の場合は京都府の宿泊設備制約が影響していると思われる。
- 3) 訪日外客の動態を国籍別にみると、自治体の海外プロモーションの重要性が示唆される。岐阜県・石川県ではスペイン、滋賀県では台湾にプロモーションをかけており、その成果が国籍・地域別訪日外客数から見られる。滋賀県は台湾の夜間滞在者が増えていることから、海外プロモーション効果が考えられる。
- 4) 海外プロモーションは重要だが、問題は投資の効率性であろう。各県が独自のプロモーションをかけることも重要だが、広域 DMO¹¹などの組織を通じたプロモーションが重要となろう。

¹¹ 観光庁によれば日本版 DMO(Destination Management Organization)については、『地域の「稼ぐ力」を引き出すとともに地域への誇りと愛着を醸成する「観光地経営」の視点に立った観光地域づくりの舵取り役と

- 5) クレジットカードデータ分析から、以下の特徴が指摘できる。①4 県とも消費総額に占める小売・宿泊の支出割合が高く、飲食や観光・エンタメの支出割合は低い。②石川県・岐阜県は宿泊支出比率が高く、福井県・滋賀県は小売支出比率が高い。課題として、飲食と観光・エンタメの支出比率が低いことから、キャッシュレス決済システムのインフラ整備の充実が重要である。
- 6) 3 節の訪日外国人の移動パターン分析にみられるように、①訪日外客の国籍は東アジアが中心である、②福井県を訪問する際、石川県の存在を無視することができない。3 つの周遊パターンはいずれも福井県を経由しているものの、前後に岐阜・石川県を控えていることから福井県は通過県となっている。これを解消するためにも、北陸広域を周遊するプログラムの開発ないしはストーリー性のあるプログラム作りが重要である。

参考文献

稲田義久・下田充(2017)、「訪日外国人消費の経済効果 爆買いから新たな拡張局面へ：比較 2013-16 年」、APIR Trend Watch No.42、2017 年 8 月 4 日。

稲田義久・松林洋一・木下祐輔(2018)、「「訪日外国人消費動向調査」個票データ分析から得られる関西インバウンド戦略へのインプリケーション(1)」、APIR Trend Watch No.47、2018 年 6 月 5 日。

稲田義久・下田充(2018)、「訪日外国人消費の経済効果 新たな拡張局面は持続するか：比較 2013-17 年」、APIR Trend Watch No.48、2018 年 8 月 3 日。

稲田義久・松林洋一・野村亮輔(2019)、「「訪日外国人消費動向調査」個票データ分析から得られる関西インバウンド戦略へのインプリケーション(2)-訪日外国人の移動パターン-」、APIR Trend Watch No.51、2019 年 1 月 11 日。

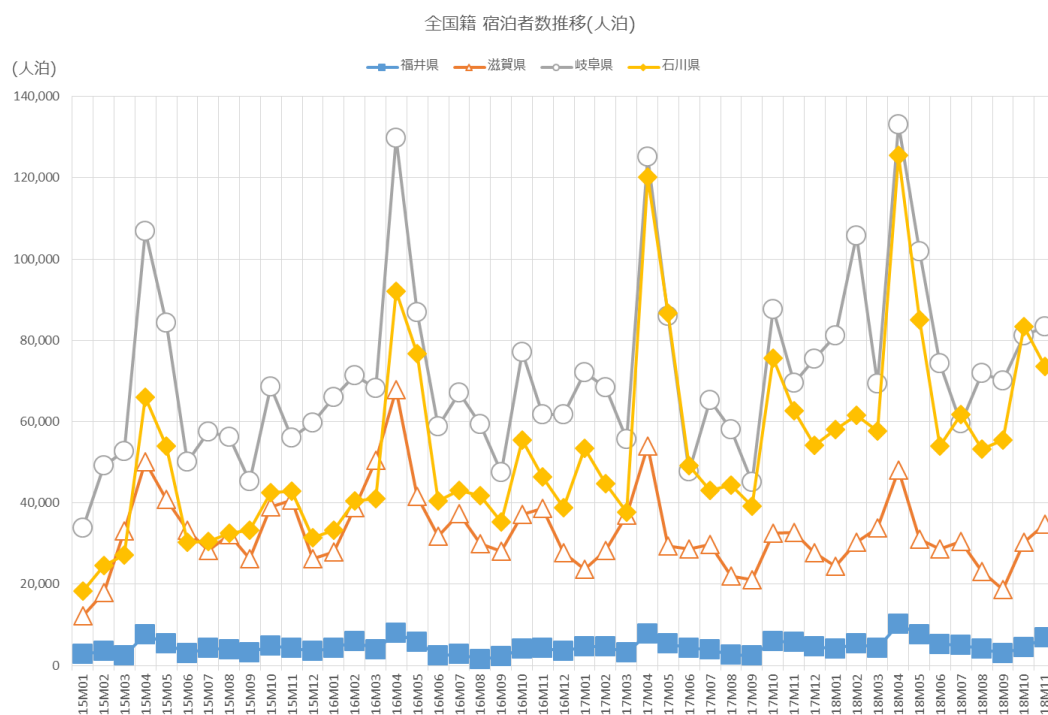
観光庁「宿泊旅行統計調査(平成 30 年 11 月・第 2 次速報、12 月・第 1 次速報)」、2019 年 1 月 31 日。

内閣府経済社会総合研究所 国民経済計算部「県民経済計算(2015)」、2018 年 8 月 31 日。

して、多様な関係者と協同しながら、明確なコンセプトに基づいた観光地域づくりを実現するための戦略を策定するとともに、戦略を着実に実施するための調整機能を備えた法人』としている。

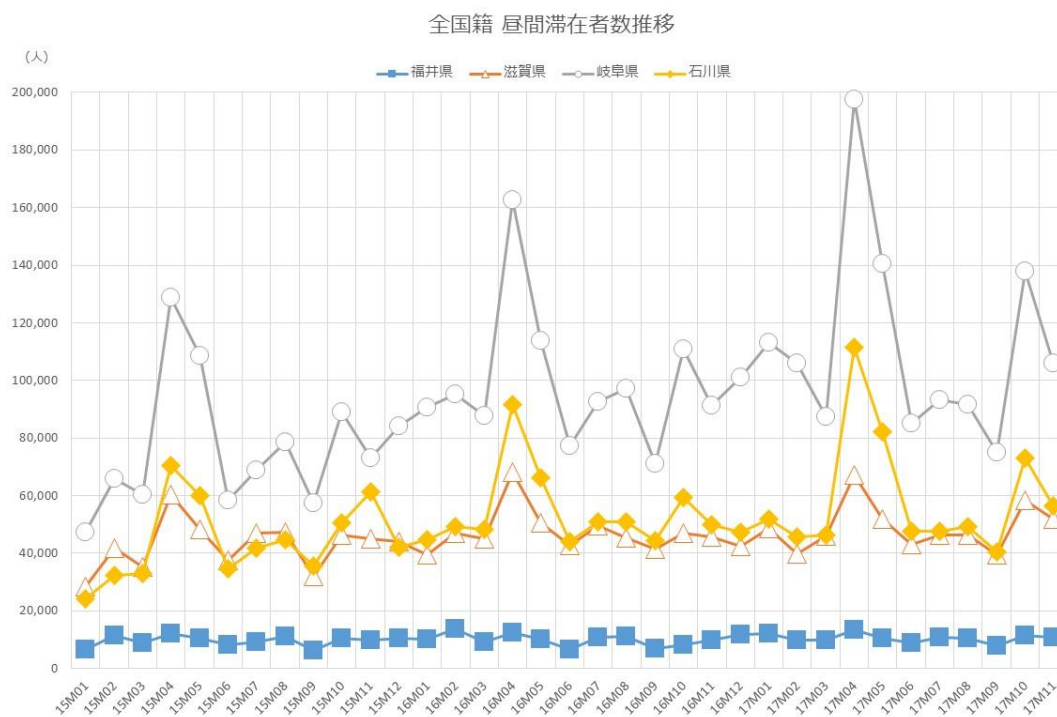
付録 図表

図表 2-1 全国籍、県別宿泊者推移



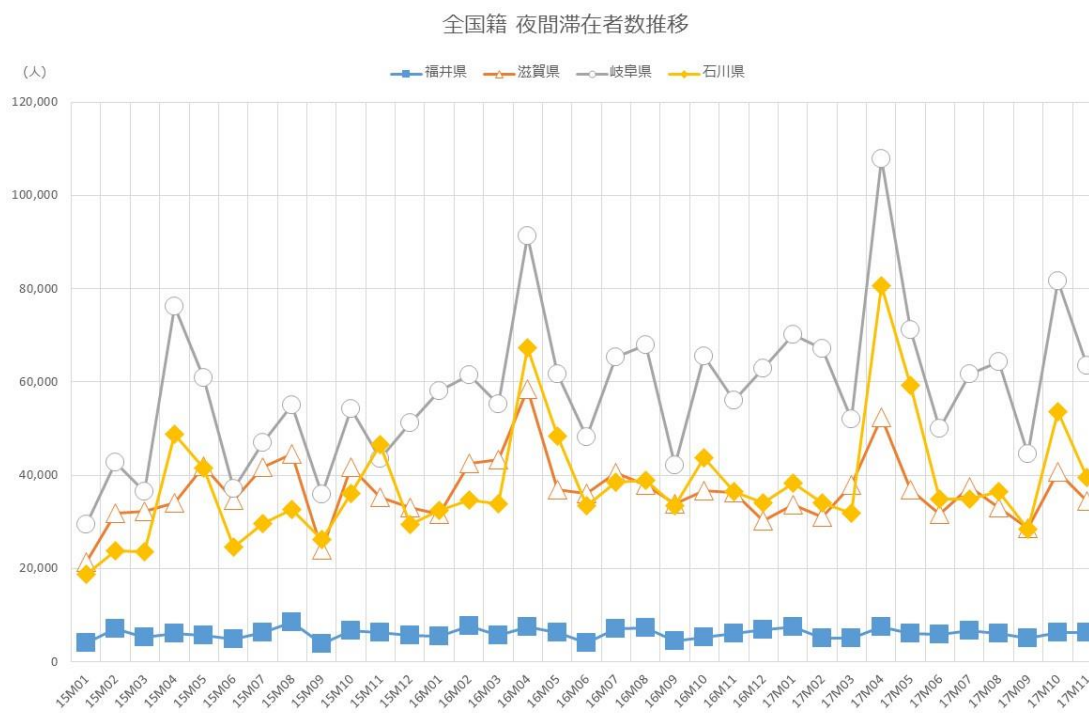
注:観光庁『宿泊旅行統計調査』より筆者作成

図表 2-2-1 全国籍、県別昼間滞在者数推移

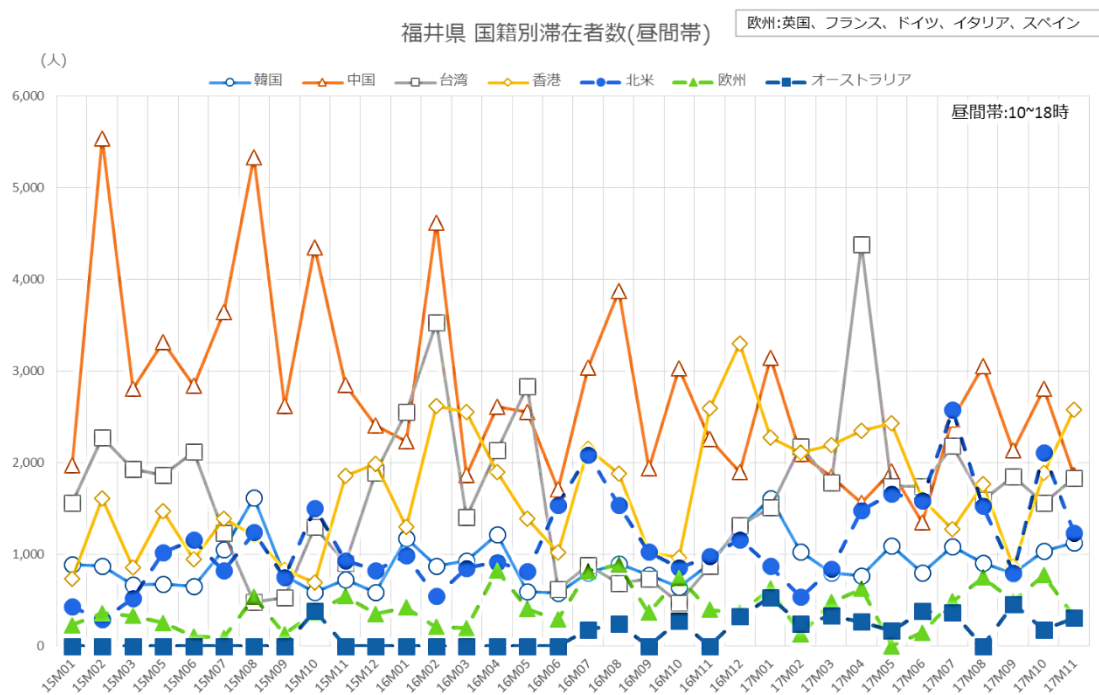


注:図表 2-2-1～10、2-3-1～4 は RESAS データベースより筆者作成

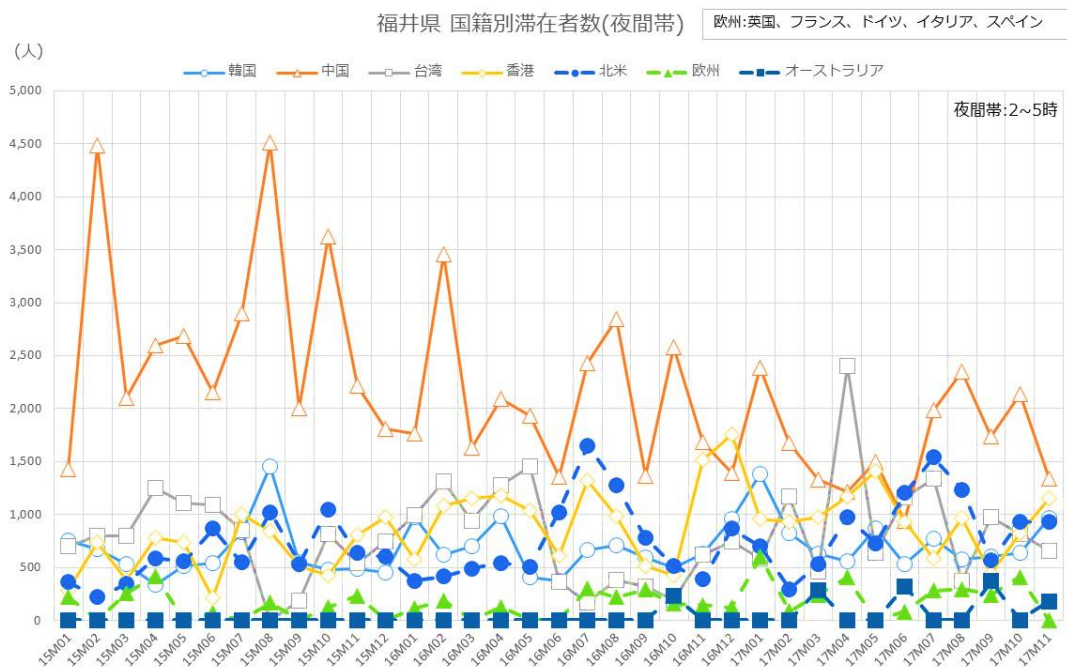
図表 2-2-2 全国籍、県別夜間滞在者数推移



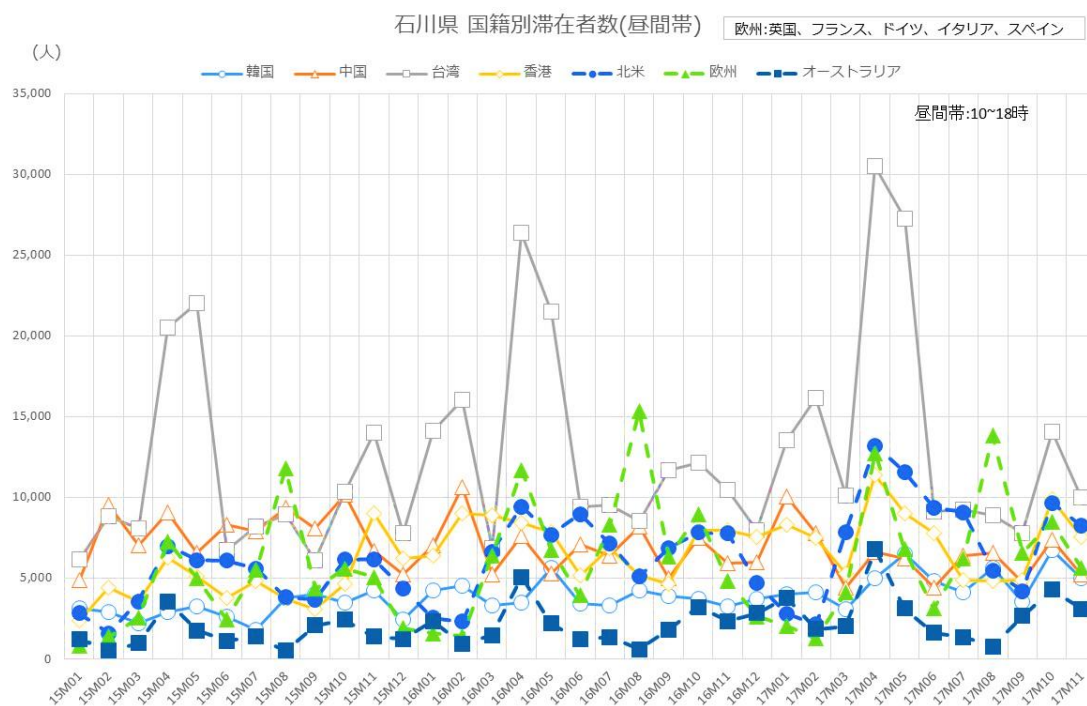
図表 2-2-3 福井県、国籍別昼間滞在者数推移



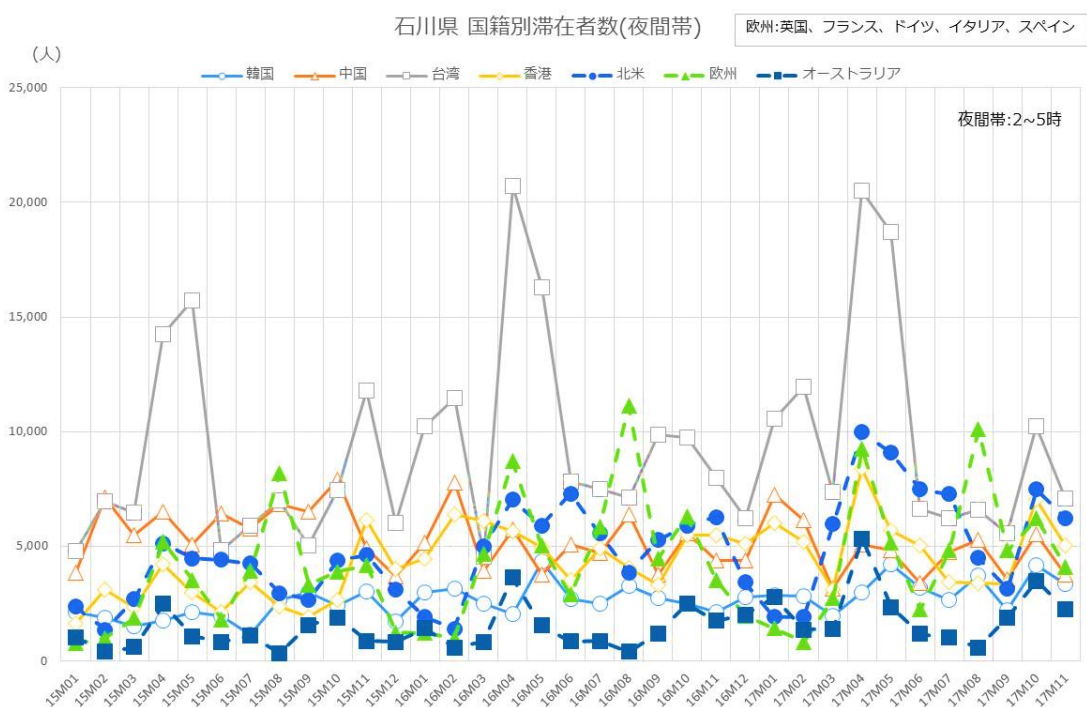
図表 2-2-4 福井県、国籍別夜間滞在者数推移



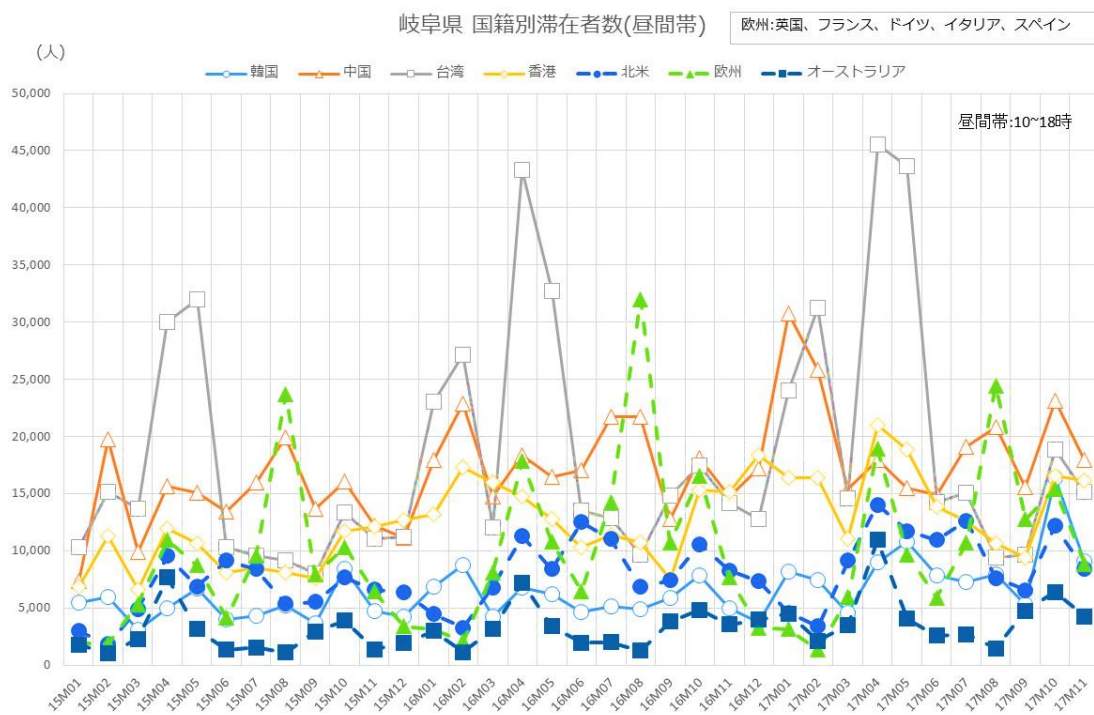
図表 2-2-5 石川県、国籍別昼間滞在者数推移



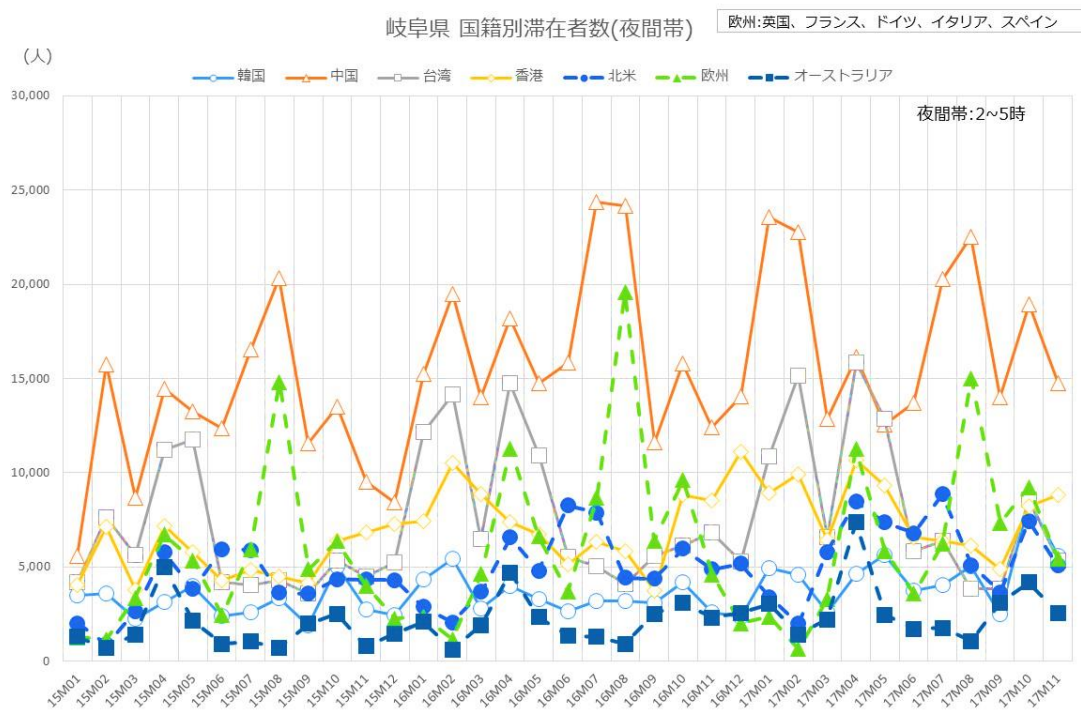
図表 2-2-6 石川県、国籍別夜間滞在者数推移



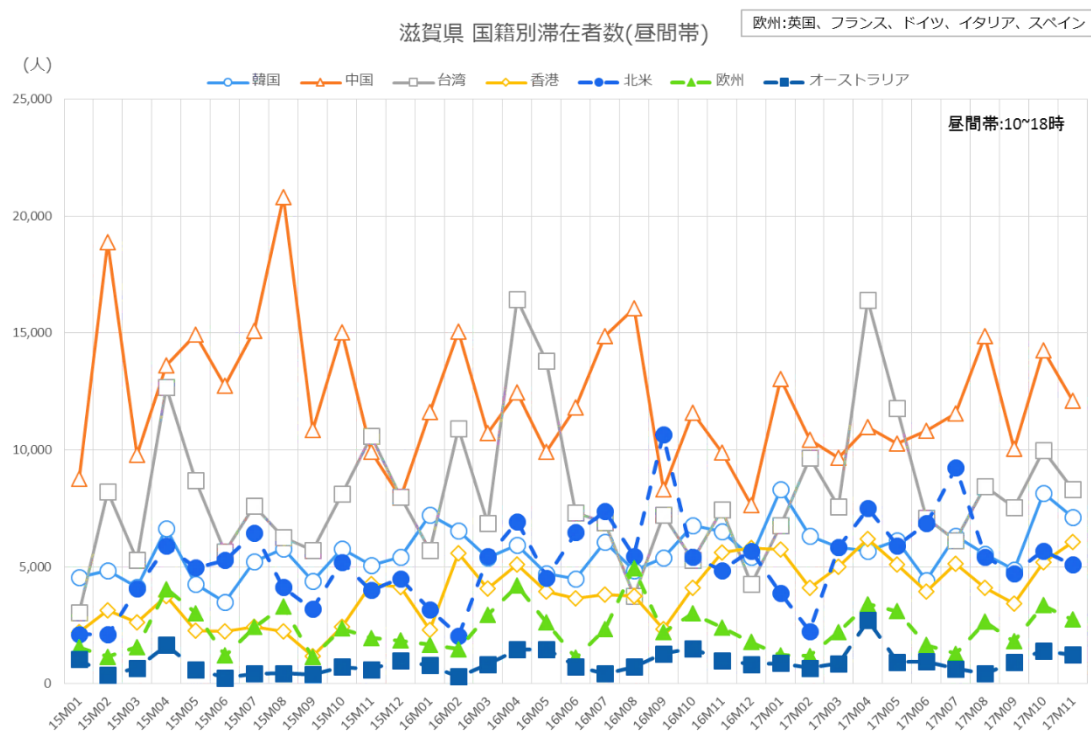
図表 2-2-7 岐阜県、国籍別昼間滞在者数推移



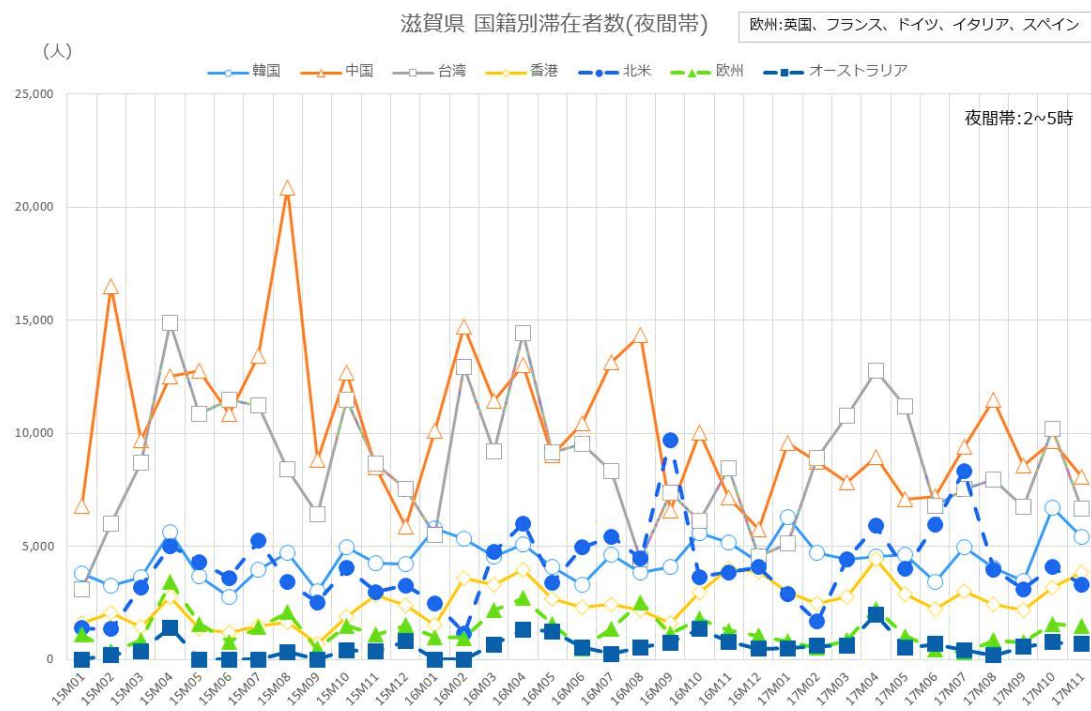
図表 2-2-8 岐阜県、国籍別夜間滞在者数推移



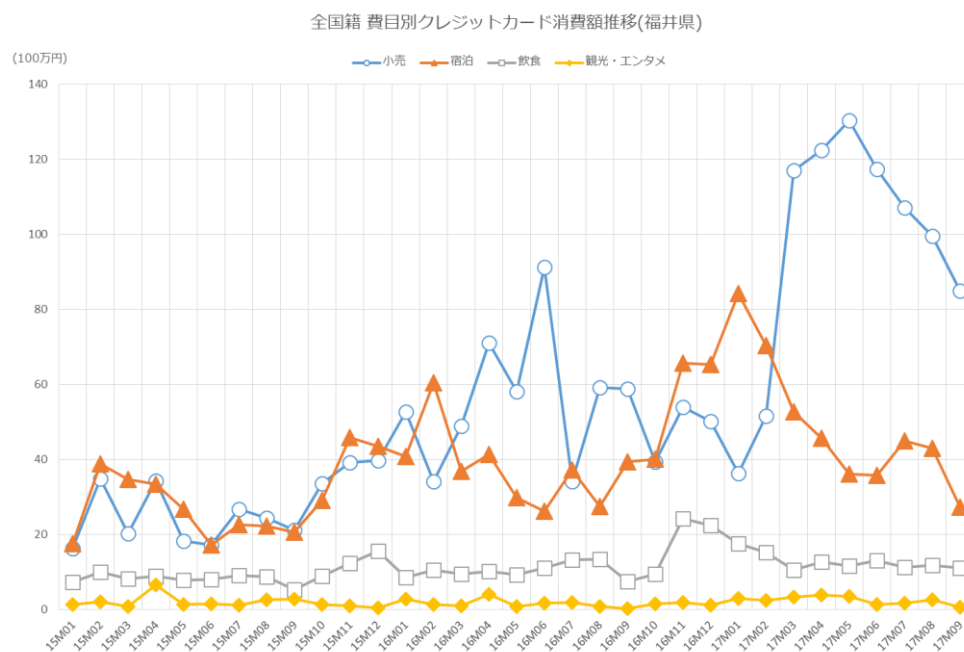
図表 2-2-9 滋賀県、国籍別昼間滞在者数推移



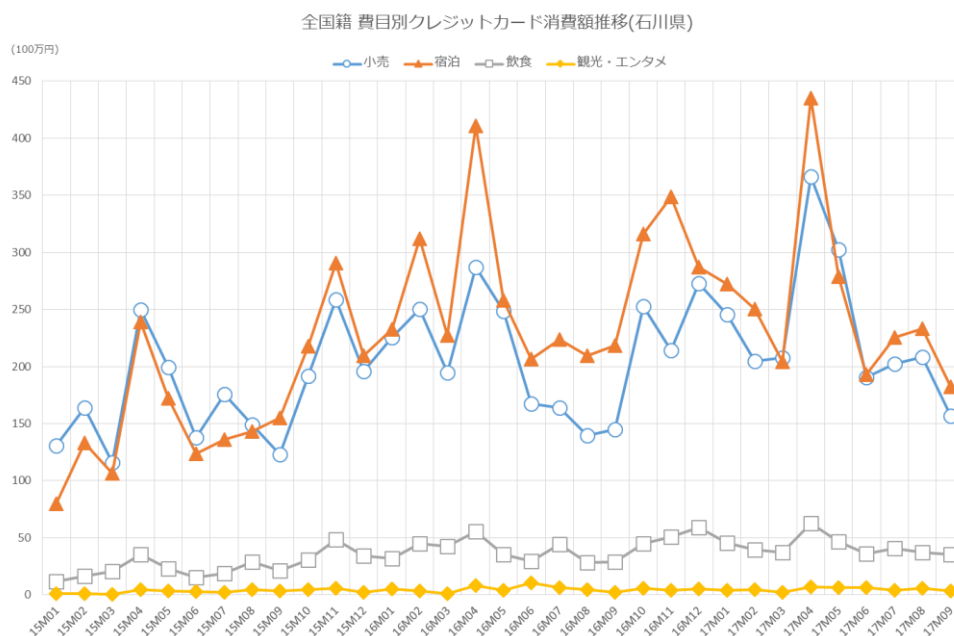
図表 2-2-10 滋賀県、国籍別夜間滞在者数推移



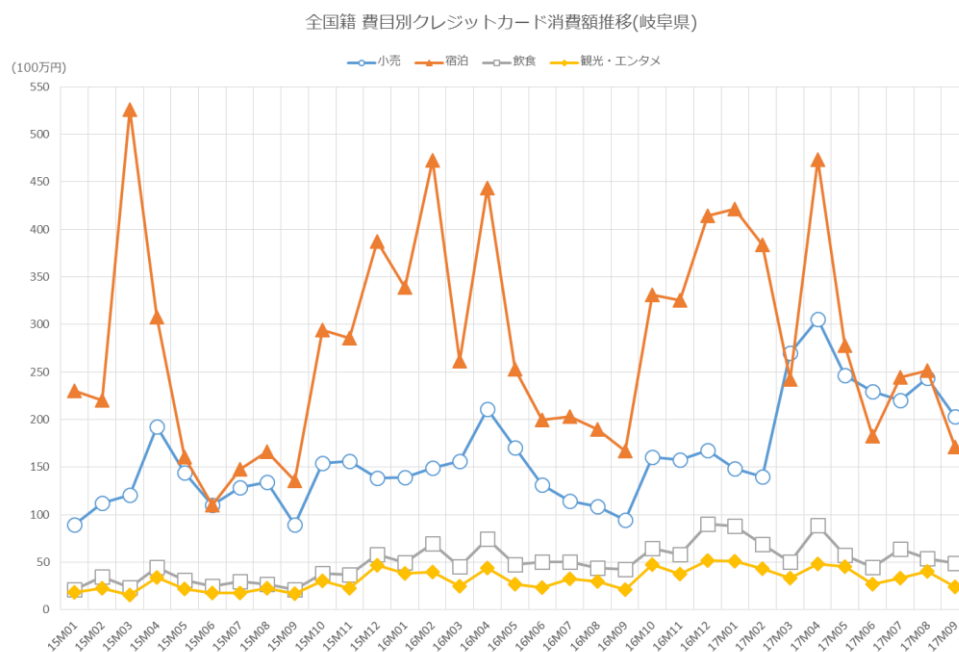
図表 2-3-1 全国籍、福井県、費目別クレジットカード消費額推移



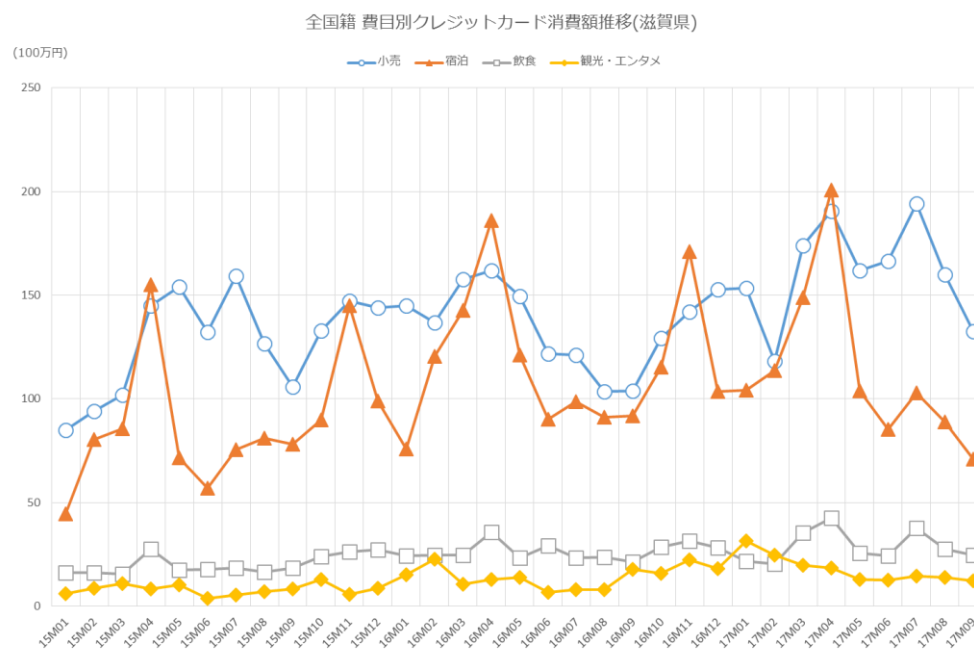
図表 2-3-2 全国籍、石川県、費目別クレジットカード消費額推移



図表 2-3-3 全国籍、岐阜県、費目別クレジットカード消費額推移

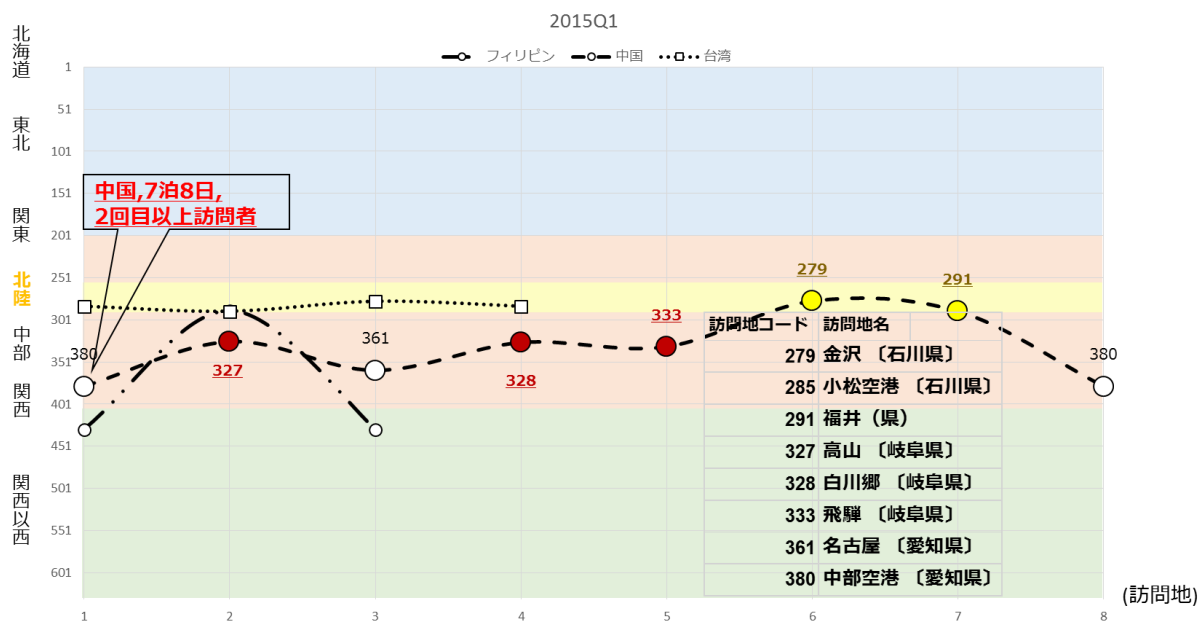


図表 2-3-4 全国籍、滋賀県、費目別クレジットカード消費額推移



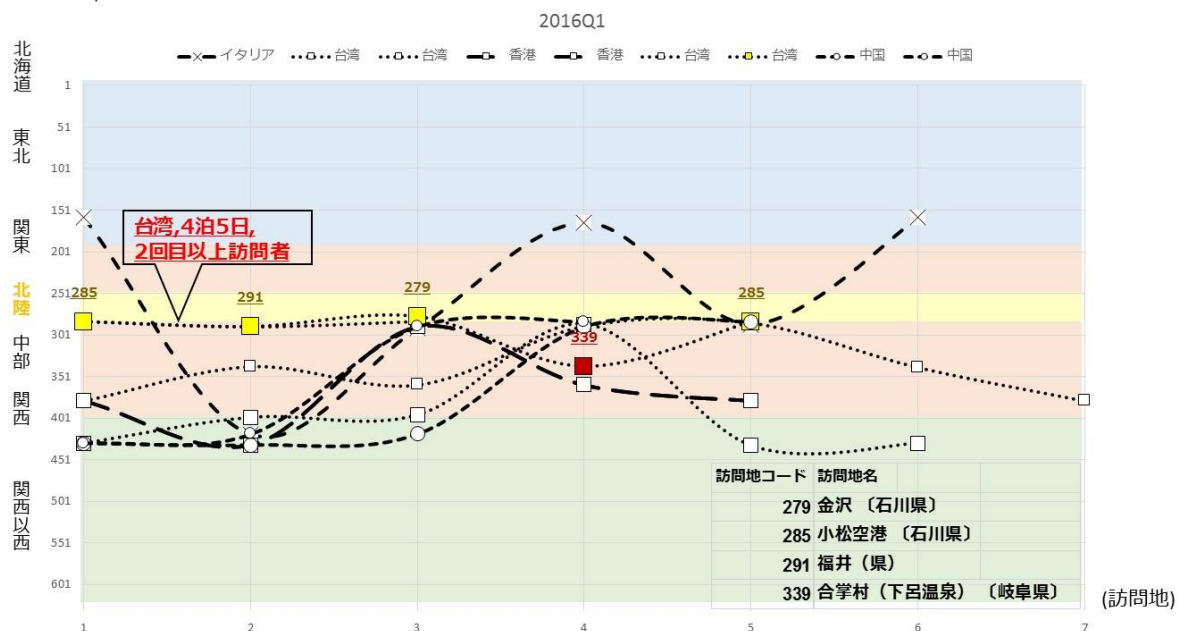
図表 3-1-1 2015Q1:観光・レジャー目的、全国籍、初回・2回目以上訪問者(再掲)

(訪問地コード)



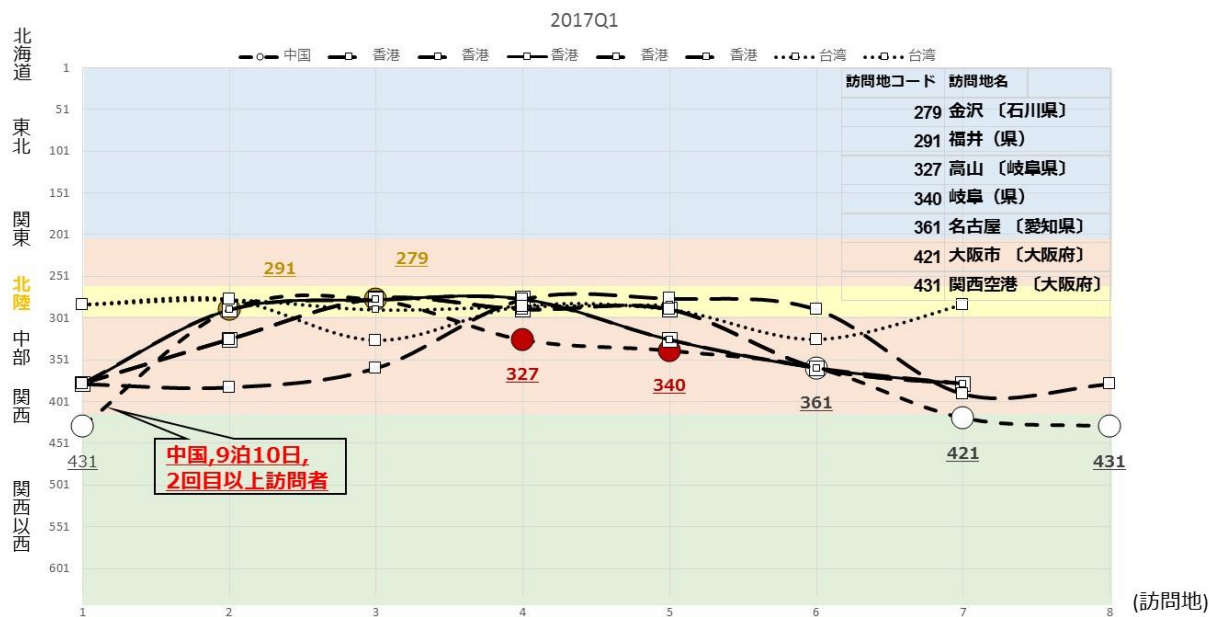
図表 3-1-2 2016Q1:観光・レジャー目的、全国籍、初回・2回目以上訪問者

(訪問地コード)



図表 3-1-3 2017Q1:観光・レジャー目的、全国籍、初回・2 回目以上訪問者

(訪問地コード)



<APIR 数量分析センター長 稲田 義久、インターン生 野村亮輔

contact@apir.or.jp, 06-6485-7690>

- ・本レポートは、執筆者の見解に基づき作成されたものであり、当研究所の見解を示すものではありません。
- ・本レポートは信頼できると思われる各種データに基づいて作成されていますが、その正確性、完全性を保証するものではありません。また、記載された内容は、今後予告なしに変更されることがあります。